

書評

Hans Martin Krämer
*Shimaji Mokurai and the Reconception of Religion
and the Secular in Modern Japan*
University of Hawai'i Press, 2015

呉 佩 遙

多くの先学者が指摘したように、日本における「宗教」という言葉は、プロテスタント諸国からの同概念の流入と、近世社会に流布した「宗門」・「教法」・「聖道」などの言葉との再編成により、近代に「religion」の訳語として形成されたものである（一）。本書の主人公である島地黙雷（一八三八―一九一一）は浄土真宗本願寺派の僧であり、欧米における「religion」をいち早く近代日本に取り入れようとしたキーパーソンである。具体的に彼は、明治維新以降にいち早く宗門の改革に着手し、そして、西本願寺の命により近代日本仏教界初の渡欧をなした人物として知られ、一八七〇年代の「政」と「教」の關係に多大な影響を与えたとされる。

近年、「宗教」なる概念の成立過程を多様な視角から考察する研究が

徐々に蓄積されてきた。例えば、英語圏では、「宗教」と「国家」の力關係に注目したジェイソン・A. ジョセフソンの『日本における宗教の創出』(The Invention of Religion in Japan, University of Chicago Press, 2012)・トレント・E. マクシーの『最大の難問——明治日本における宗教と国家の形成』(The 'Greatest Problem': Religion and State Formation in Meiji Japan, Harvard University Asia Center, 2014) が挙げられよう。そして日本においては、磯前順一の『近代日本の宗教言説とその系譜——宗教・国家・神道』(岩波書店、二〇〇三年)、「前近代」と「近代」に光を当てようとした林淳の「宗門から宗教へ」などがある。「宗教」という言葉が一八八〇年代までの日本列島において一般化していなかったことから窺えるように、「宗教」のあり

方は国民国家の枠組の中で盛んに議論され続けていた。

本書の著者であるハイデルベルク大学教授のハンス・マーティン・クレーマは、上述した先行研究の成果を踏まえ、明治期を代表する僧侶島地に焦点を当て、政治的かつ社会的なコンテクストによせ、「宗教 religion」と「世俗 secular」が如何に近代日本という文脈で「再概念化 reconception」されていったかを綿密に考察した。具体的に彼は、ポストオリエンタリズム理論を批判的に取り上げ、近代日本における「宗教」の形成を単なる「創出 invention」あるいは「翻訳 translation」のプロセスとみなすのではなく、西洋からのそれと土着の知識体系の混合による「再概念化」の過程という視座を提供しようとしている。

それに際して、重要な役割を果たすのが、グローバルな「交渉 negotiation」の過程という概念である。すなわち、本書の序章で記されたように、長らく文化的に普遍なものとして語られてきた宗教は、比較宗教学者の W. C. スミス (一九一六—二〇〇〇) 以降、キリスト教的な独特の枠組においてのみ成立することが強調されてきた。しかし著者は「交渉」という双方向的な視角を取り入れることにより、従来の認識の上書きを試みている。本書の構成と各章の要約は、以下の通りである。

序章

第一章 近世日本における宗教分類

(Categorizing Religion in Early Modern Japan)

第二章 明治初期の仏教と神道家の挑戦

(Early Meiji Buddhism and the Shintoist Challenge)

第三章 「宗教」から「ハレジモン」へ

(From "Sectarian Teaching" to "Religion")

第四章 「宗教」の西洋的起源

(Western Sources of Knowledge)

第五章 「宗教」の対義語にまつわる長い歴史

——「世俗」と「世俗化」

(The Long History of Religion's Opposites: "The Secular" and "Secularization")

結論

付録 島地黙雷「三条教則批判建白書」[英訳]

序章では、「近代日本において「宗教」がいかに構築されたか」という本書最大の問題意識の理論的な背景が整理されている。著者は近代日本の宗教概念の形成に決定的であったとされる三つの要素——「西洋の影響 the Western impact」「国内の政治課題 the political agenda」「土着の伝統 the indigenous traditions」——を取り上げ、それらが具体的にいかなる役割を果たし、いかなる「相互」作用によって「宗教」を構築していったのかをグローバルな視点から考察を試みている。そこで島地黙雷が、いわば「伝統」と「近代」のはざまで活躍した行為主体として取り上げられる。さらに言説研究の手法として、前近代ではほとんど用いられなかった「宗教」という言葉自体より、明治初期に「religion」の訳語として提示された「宗教」「教法」などの構成要素であり、江戸時代においてすでに独立した意味を持っていた「教 teaching」や「法 law」「宗 sect」を追跡したほうが、日本における「宗教」の成立過程を読み解くためには有効だとする。

第一章において、著者は「宗教」という言葉がなぜ「religion」の訳語として案出されたのかという関心から出発し、一六世紀に遡ってそこで生み出された概念的遺産が「宗教」定着に確実に影響を与えたと論じる。著者によると、江戸期の日本において確かに、「社会生活におけ

る独立領域」や、「人類の普遍的な要素」という意味での「religion」を見出すことはできないが、一七世紀初頭から異なる教理体系を語る上で「religion」の類義語はすでに存在していたという(二二頁)。そして、東アジア漢字文化圏の枠組で、広義での「religion」の領域を包摂する言葉として「教」および「道 way」が用いられていたが、中世末期から起きたキリスト教との接触と、近世となってそれに対する徳川幕府の宗教政策の影響によって、日本独特の「religion」の領域が徐々に形成されたと述べる。具体的には、一五八七年に豊臣秀吉(一五三七—一五九八)が發布した「伴天連追放令」、一六一四年に発令され、徳川時代のキリシタン禁制政策の基本として機能した「伴天連追放文」などのテキスト分析を通して、「法」や「宗」など、仏教といった土着体系を語る上での用語が、キリスト教に対しても使用されるようになったことを明らかにしている。さらに幕府の宗教政策、特に本末制度や寺請制度の成立が言語実践にもたらした影響を検討し、それらの政策によって仏教における諸宗派の区別が強く意識されるようになり、宗門としての組織の意味を多分に含む「宗」が「法」より頻繁に現れ、キリスト教を指す場合にも「邪宗 devious sect」という名がより多く用いられたという。以上の議論を踏まえた上で、島地が維新时期以降に構想した宗教概念を考察するにあたり、「神道」の問題に加えて真宗の伝統思想の影響にも注目しなければならないという。

そこで、第二章では一八七〇年代という近代の政治的・社会的なコンテキストにおいて「religion」が如何に形成されたかについて、島地が渡欧中に上申した「三条教則批判建白書」(一八七二年)とその周辺を論じている。著者は「三条教則批判建白書」を宗教なる領域の定義を試みた最初の一つとし、そこにおいて「政」と「教」の分別が主張されたのみならず、「宗教」の「内実」と「本質」が探求されたとする。そこ

で彼が属した真宗に焦点を当て、その伝統教義、神道への姿勢、明治初期の為政者との関係といった側面から、近代における真宗の特殊性を主張する。著者は「religion」なる領域を指す概念の革新は、一八七二年に教部省が教導職に下達した「三条教則」によってもたらされたとし、真宗側の反応としてまず、経済に関する著作で有名であった浄土真宗本願寺派の佐田介石(一八一八—一八八二)の『教諭凡道』(一八七二年)、真宗大谷派の学僧である樋口龍温(一八八〇—一八八五)の『教則三条講述』(一八七三年)に注目している。佐田と樋口は、基本的に「三条教則」、特にその「敬神」を肯定する立場にあったが、「三条教則」を宗教の統制政策というよりも一種の道德的な規範として捉えた。著者によると、「religion」は「三条教則」のような政策の対象とは領域が異なるということがすでに暗示されていたという。一方、佐田と樋口より一世代若い島地は「三条教則批判建白書」において、「宗教」という言葉を用いつつ「人為」の「政」と「神為」の「教」をより明確に分別し、「教」を内面的な領域に限定すると同時に、「神道」を宗教の範囲から外すような語り方を先駆的に案出したという。

第三章では、「宗教」の対語として構築され、前近代から用いられた言葉である「治教 civic teaching」に関する概念的な考察がなされている。「三条教則批判建白書」で知られている島地は先行研究において、専ら「政」と「教」の分別を主張した人物として捉えられてきた。これに対し、著者は彼の語りの枠組が一八七二年から一八七四年にかけて、「政/教」より「治教/宗教」の二項対立に変わったと鋭く指摘し、「宗教」は「政」ではなく、「治教」の対語として形成された(八六頁)と示唆している。ここでの「治教」は、島地自身も言及したように、神道による国民教化を企て、一八七〇(明治三)年に始まった大教宣布運動の詔書の中から借りられた言葉であり、もともととは神道の果たすべ

き役割を表している。一方、著者は島地の「教部改正ニツキ」(一八七四年)や大谷派の楠潜龍(一八三四—一八九六)の「十七論題略説」(一八七四年)などのテキストの分析を通して、そこでの「治教」が「神道」のみを指すのではなく、「教化」の意味を含めた広い概念として再構築されたとする。

この「治教」の系譜を辿るべく、著者は近世に遡り、その意味の変遷を四つの段階に分け、それぞれを丹念に検討する。第一期は、江戸初期に儒学のコテキストで用いられた「治教」であるが、その意味は必ずしも一様ではない。第二期にあたる後期水戸学の枠組では、治国の術としての儒学的な意味を継承しつつ、国学の影響により、土着の神体への崇拜が主張される。この文脈で儒教と神道は同様に扱われたが、第三期の明治初期になると、「治教」を用いる場合に、神道の絶対的な優位性が強調される。また、「治教」が為政者の臣民支配の方針を指すのみならず、臣民「教化」の意味も帯びてくる。第四期は、島地や楠などの仏教者による用法であり、彼らは「治教」を「宗教」の対義語として構築することにより、江戸期の「教」の枠組を維持しつつ、「神道」を「宗教」から外そうとした。著者はこの再解釈の試みが、日本における「神道の問題」"Shinto problem"と深くかかわっているとし、この国内の状況が、「religion」の導入を方向付けたと主張する。

第四章では、島地のヨーロッパ滞在経験に着目し、それが彼による宗教の「再概念化」にいかなる影響を与えたかを検討している。一八七二年、島地は西本願寺の海外教団視察団の一員として出発し、約一年ヨーロッパに滞在した。しかし、先行研究がこれまで論じたような、島地が単に受動的に「キリスト教」とりわけ「プロテスタント」に影響され、そしてヨーロッパですでに形成された「religion」概念を日本に持ち帰ったという筋書きではなく、島地のヨーロッパ滞在を「交渉」の過程と

して語り直すことに焦点が置かれる。そこで、著者はこれまで着目されることがなかった史料の丹念な精査を通じて、島地がパリおよびベルリンで影響を受けた具体的な人物を特定している。その中でも、パリでは民俗学者・言語学者のレオン・ド・ロニー(一八三七—一九一四)、実際に会うことはなかったが、『耶蘇伝』(Vie de Jésus)という本を通して島地に示唆を与えたエルネスト・ルナン(一八三三—一九一三)、ベルリンで会ったドイツの自由主義神学者、特にエミル・グスタフ・リスコ(一八一九—一八八七)との「交渉」に光が当てられる。著者によると、これらの人物のリベラルな主張は、当時のヨーロッパにおいて決して主流ではなかったが、日本国内の政治的・社会的な課題を常に念頭に置いていた島地は、そのフィルターを通して「religion」を受容したという。そして島地は帰国後、ヨーロッパで学んだ洞察を「religion」のあり方の模索に応用し、神道の排除やキリスト教への対策、そして合理的な宗教としての仏教の構築に尽力していった。

第五章において、「宗教」の対語とされてきた概念としての「世俗」と「世俗化」が検討される。著者は村岡典嗣(一八八四—一九四六)や丸山真男(一九一四—一九九六)の論述に見られるような宗教の衰退という語り方、そして丸山がその文脈で用いた「世俗」の系譜を追跡すべく、江戸期まで遡って「世俗」を言説史的に考察する。そこで、前近代から用いられた「世」と「俗」の用法、そして真宗の枠組において説かれる「王法仏法」、「真俗二諦」に注目し、明治期の「世俗」という言葉が継承した概念的遺産を掘り出そうとする。また、「世俗」という用語の成立過程が「宗教」と並行していることを指摘し、宗教概念がこの対語との相互関係によって構築されたことを強調している。著者はさらに、本書の対象たる島地の営為に見られるような宗門の信念・実践体系と国家を分別する傾向は、上述した真宗の伝統を継承したとしつつ、彼が

「治教」という言葉を「宗教」と対置させることによって、その伝統の枠組を乗り越えようとしたと論じている。

結論では、本書で一貫して主張される、宗教概念の形成に決定的であったとされる三つの要素——「西洋の影響」、「国内の政治課題」、「土着の伝統」——が各章の整理と議論の補足によって振り返りがなされている。そして、「宗教」の形成を西洋のインパクトのみに求めるポストオリエンタリズム批判に対し、著者は「一九世紀における宗教概念のグローバルな歴史は、西洋の発明がほかの地域や国に輸出されたのではなく、グローバルな言説における（多様性を備えた）共同構築である」と指摘する（一四一頁）。

次に、本書が近代宗教史研究にいかなる貢献をなしたかについて、個人的な所感と展望を述べるように努めたい。本書でしばしば強調されたように、近代日本における宗教概念の形成は、西洋からの一方的な輸入というよりも、土着の行為主体が自らの立場を以てグローバルな言説の中に積極的に参入した「交渉」という過程の産物である。この卓見とも言うべき指摘は、島地のみならず、日本の他の仏教者あるいは仏教結社に焦点を当てるに際し、グローバルな動向を視野に入れ、そこで研究対象がいかなる「交渉」を試みたかという方向にも、今後、様々な角度から展開、深化させていくべきであろう。例えば、欧米における日本近代仏教史研究の先駆者の一人であるジェームス・ケテラーが主著『邪教／殉教の明治』において、一八九三年に開催されたシカゴ万国宗教大会に注目し、そこにおける表象としての「仏教」の再構築に着目しているが⁽²⁾、著者が示したような観点からさらに、「仏教」の内実・本質の「交渉」の舞台として、シカゴ万国宗教大会をめぐる研究も可能であろう。

そして、前近代から近代への展開にまつわる著者の貢献を挙げたい。

本書では、土着概念の遺産が丹念な史料分析によって掘り下げられ、そこで、島地のような前近代と近代のはざままで生きた仏教者が継承した「伝統」とその系譜が解明された。近代仏教研究の分野においては昨今、前近代と近代の「断絶」だけではなく、その「連続性」も考える必要が強調されている。「宗教」の創出に不可欠な要素として機能した「宗門」・「教法」・「聖道」などの検討は無論、組織や団体の再編、教義の再解釈などに関する研究も求められている。本書は「宗教」の構成要素を江戸期まで追跡したことや、真宗の「伝統」の近代的な展開に光を当てたことで、「伝統／近代」という対立の問題に対し、大きく貢献を果たしたと言える。一方、本書で紙幅を多く割いた真宗の伝統教義が具体的にいかに島地に影響したか、換言すれば、様々な「伝統」が並存したなかで、彼はいかなる「伝統」と関わり、いかにその再解釈を試みたかについて、もう少し説明を要すると考えられる。

最後に、内面的な領域に属する宗教概念の形成と真宗の特殊性の関連について言及したい。著者は島地の事例にも見られるように、宗教概念が形成される過程を通し、真宗の枠組で親鸞から継承された「信心」が再解釈されていくという重要な洞察を披瀝している。その結果として、真宗の伝統教義が「宗教」の意味に影響を与え、同時に、真宗そのものも「宗教」というカテゴリーによって変貌していく。一方、「宗教」の核心とされる「信仰」も近代を通して構築された概念であることを忘れてはなるまい。例えば、評者の研究対象である境野黄洋（一八七一—一九三三）は、世紀転換期に巻き起こり、健全な「信仰」の樹立を掲げた新仏教運動の主な指導者の一人として知られているが、彼の知識体系——とりわけ信仰理解——も、真宗の「伝統」との関連で形成されていた。かかる信仰言説と真宗の「伝統」とのかかわりは、今後、さらに検討されていくべきであろう。

本書は近代日本における宗教概念がグローバルな「交渉」の産物であるということを示す試みであるのみならず、近代の「知」のコミュニケーションを通時的かつ共時的に考える方法を提示したものである。「交渉」をキーワードとして宗教概念の構築を考察した本書によって、近代日本研究におけるグローバルな視野が広がることを切に望む。

(University of Hawaii Press, July 2015, 246 pp., US\$59.00)

註

- (1) 林淳「宗門から宗教へ——「宗教と倫理」前史」(池上良正・他編『宗教とはなにか・岩波講座宗教Ⅰ』岩波書店、二〇〇三年)、一六九—一九〇頁参照。

- (2) James E. Ketelaar, *Of Heretics and Martyrs in Meiji Japan: Buddhism and Persecution* (Princeton: Princeton University Press, 1990) 岡田正彦訳『邪教／殉教の明治——廃仏毀釈と近代仏教』(へりかん社、二〇〇六年)、一九一—二四四頁。

(東北大学大学院国際文化研究科博士課程前期)